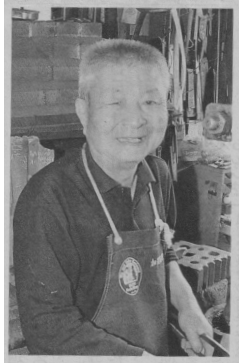
2016年（平成28年）4月29日（金曜日）

福井新聞

◇瑞宝単光章・伝統工芸業務功労（越前打刃物製造業従事者）◇

加茂（かも） 勝康（かつやす）さん

打刃物 新商品開発に力



父の病気に伴い、高校を中退し打刃物の世界に入った。それから60年になる。「山あり谷あり。がむしゃらにやってきた」と振り返る。

鎌などの従来製品が低迷する中、1975年に開発したのが「野菜収穫包丁」だった。キャベツやレタスを茎から切るための包丁で、先が丸い。当時では珍しい、ユーザーとの共同開発だった。自ら野菜産地を回り、代名詞ともいうべき商品に育てた。

80年代には、他の若手とともに工業デザイナー川崎和男氏と組んで新商品を開発。91年には夕ケフナイフビレッジ協同組合を設立した。共同工房建設は大きな投資だったが「越前打刃物というブランドの再構築など、やるしかないという思いだった」。

ドイツでの見本市には10年以上前から出展。今や同組合商品の6、7割は海外向け。「外国で売れるなんて、前は想像できなかった。だからこそしっかりしたものづくりが大事」。スキーで鍛えた体は頑健。今も毎日工房に出る。越前市。75歳。（大谷純平）